



世田谷文学館友の会

会報 第54号

平成30年12月14日
世田谷文学館友の会
〒157-0062
世田谷区南島山1-10-10
TEL 03-5374-9111
FAX 03-5374-9120
ホームページ
<http://setabuntomo.net/>

共催講演 文学と音楽との対話

―白秋・啄木の詩と音楽―を聴講して

桐原 義隆

啄木はワグネルが好きだった？これがこの講義に興味を持った一番の理由であった。私の中ではどうあってもイメージが結びつかない二人。片や「……猶わが生活楽にならざりぢつと手を見る」のような、凡そ西洋音楽とは無縁の印象の歌人であり、片や「タンホイザー」のような壮大なオペラを作出したドイツの作曲家である。啄木は本当にワグネルが好きだったのだろうか……との疑問を抱いたまま、興味津々で細川光洋先生の講義を聴講した。

啄木は与謝野鉄幹・晶子を慕い、文学をもつて身を立てるべく十七歳で上京するのだが、この時『明星』には五線譜がデザインされた鉄幹の作詞による洋楽風の歌のページが設定されていた。このような誌面は当時としてはかなり新鮮でモダンであったことから、啄木が憧れをもってこのページに触れ、洋楽（のようなもの）を海綿の水のように吸収したであろうことが想像できる。そして啄木が十八歳となった明治三十六年五月、岩手日報に最初の評論『ワグネル（ワグナー）の思想』が掲載されるのだが、この評論が生まれる背景には啄木とワグネルを結び付ける幸運な出来事があったのだ。翌明治三十七年七月二十三日の日記『甲辰詩程』に次のように書か

れている。「……我は喜びを以てワグネル（ワグナー）の事書かんとす。楽劇『タンホイゼル（タンホイザー）』中のマーチが絶代秀俊の作……恋しき妻よりきくをうべき幸運を荷へる者なり……」と。なんと、啄木はこのワグネルの曲を彼の妻である節子自らが弾くヴァイオリンによって知るのである。そしてこの評論に続き、明治三十六年十二月の『明星』に「愁調」という詩が発表されるのだが（これは初めて「啄木」の名前が用いられた作品でもある）、細川先生によると、



熱を込めて語られる細川光洋氏

2018年9月22日

於・文学サロン 撮影・幾田充代氏

この詩の「その二」は「白羽の鵲船（とりぶねとは白鳥を指す）」との題で、ワグネルの歌劇「ローエングリン」から着想を得たと考えられる内容で構成されており、つまり啄木は当時十八歳にしてこの物語を原書で読み、理解し、自身の作品に投影していたと思われるのだ。

ここで新たな興味が湧き起こる。啄木はワ

グナーの楽曲を節子のヴァイオリン以外にも聴いたのだろうか……？ 実はそれに応える随筆も存在するのだ。啄木二十歳の時の随筆『閑天地』（四）落人ごころ（明治三十八年六月）によると、当時伯林（ベルリン）から仙台に帰朝して間もない第二高等学校教授の土井晩翠を訪ね、晩翠が持ち帰った蓄音機で「ワグネル（ワグナー）」の「タンホイゼル第三齣（タンホイザー第三幕）」をはじめとする様々の西洋音楽をしっかりと聴いていたのである。随筆ではその時の様子を次のように綴っている。「……耳まづしき我らにはこの一小機械子の声さへ、猶あたたかき天苑の余光の如くにおぼえぬ」と。

講義会場では細川先生自ら持参した名盤の数々を実際に掛けていただき、特にワグナーの歌劇「タンホイザー」の「夕星の歌」（第三幕）、つまり宵の明星を指すこの美しい調べを聴いた際には、詩誌『明星』をも、その誌名が語る通りワグナーの影響を受けていたのだらうとの解説に心より納得しつつ、啄木の繊細な感性の源流にもワグナーが寄り添っていたはずと、この後に生まれる珠玉の作品の数々に思いを馳せるのだった。

後半の白秋の講義とともに、まさに文学と音楽とが美しく対話したひとときであった。時にマイクを使い忘れるほど熱心にご講義いただいた細川光洋先生に心より御礼を申し上げます。

（友の会非会員・朗読会ゼフュロス代表

文学で救われる



ム ユ ヒ
林 維喜

母が急に亡くなり、又母の葬式が終わった三日後、親友さえ自殺で死んでしまった、人生でもっとも辛い時期を過ごしていた時、宮沢賢治の詩に接するようになった。物忘れが激しい自分であるが、くマケズ、という言葉だけは深く心に刻まれた。世の中で何かにあるいは誰かに本気で負けたと思う人はあまりいないだろうが、詩という作品を借りて負けたくない率直な気持ちをそれほど強く、又一生懸命に伝えようとしている作家はどんな方だろうか、とても好奇心が湧いてきた。

彼の作品を読んでいくうちに、毎日嘆くことしかできなかった自分に、くマケズ、という気持ちが徐々に染みてきた。賢治が語っていた世界を救うほどの熱望まではいらない、自分自身だけに限られず、たわずかな希望であつたけれども。

それで日本の文学、その中でも賢治の作品をもつと読みたくなって、大学院に入ることを決めた。これはあくまでも私の個人的な経験であるが、文学に出会ったからこそ自分に起きた出来事である。

数年後父が死んで、くマケズ、の気持ちにも変化があつた。く負けずに頑張ろう、から、く負けてもいいんじゃない、へ。力を抜いて父の死も毅然として受け入れようと。もちろん以前よりいい年になったおかげでもあつたと思う。

くマケズ、と叫んだ賢治は結局負けたのか？死を乗り越えられなかったので、負けた？しかし彼が伝えようと努力した精神は様々なバージョンで

国境さえ越えておおぜいの人々に影響を与えている。それを考えてみたら、負けたとしても負けていないとも言つてもいいのではないか。だから、私も、く負けてもいい。く負けてもいいじゃない、と自分のことを自ら癒す技を身に着けることもできた。

まだ人生の最後ではないので語るのは早いかもしれないが、これからもたくさんいいことや辛いことは起きるだろう。時によって、くマケズ、の人生を選ぶか、く負けてもいい、という人生を選択するか迷う時もあるだろう。その中で一つ、ちゃんと乗り越えていくべき！と今日もつぶやいている。

(韓国 新丘大学 非常勤講師 日本語担当、今夏訪日の際 世田谷文学館にて開催の講座、「木下圭太郎と白秋・啄木」に参加)

第三四回(平成二九年度)世田谷文学賞入賞作品

短歌部門 (佳作) 奈良雄次

初めての歩みする子と添う母のひとまとまりの空間がある

短歌部門 (佳作) 堀越照代

吾の孫の寝顔は娘の夫に似る両手でそつと毛布をかける

俳句部門 (三席) 長谷川 瞳

授乳室ある図書館や緑さす
すいとんは母の味なり終戦日
大富士の大夕焼を背負ひけり

俳句部門 (秀作) 藤森成雄

コスモスの風を背に試歩の妻
時雨るるや供花の絶えたる輪禍跡

俳句部門 (佳作) 長谷川明彦

どんぐりにしこ名をつけて紙ずもう

川柳部門 (佳作) 岩崎能楽

頼りあう間合いに妻の一呼吸

川柳部門 (佳作) 北條忠政

教育勅語唱えし後は「鳩ぽっぽ」

川柳部門 (佳作) 且味香子

ラジオからどこかに届くラブレター

詩部門 (三席) (氏名のみ) 花潜 幸

詩部門 (佳作) (氏名のみ) 石川厚志

詩部門 (佳作) (氏名のみ) 佐藤 彰

《注》入賞作から友の会会員の作品をご紹介します。
なお、詩等の作品は『文芸せたがや』(No.三四 二〇一八・三刊行)をご参照ください。

世田谷文学賞は、世田谷文学館が、短歌、俳句、川柳、詩、随筆の部門で隔年募集します。応募資格者は、世田谷区内在住、在勤、在学の人、および世田谷文学館友の会会員です。



「ぼくらの原っぱ変遷記」

矢吹 申彦

我が家の目の前に、北沢公園という、住宅街の小さな小さなオアシスがある。東西五十メートル強、南北四十メートル弱、後に西側の一軒家跡もつぎたして、計二一七〇平方メートルの公園である。

ここが、子供の時には、とてつもなく広い原っぱに思えた土地である。我が家から小学校までは、およそ百二十メートル。それでも原っぱを斜めに横切る方がより近道だから、小学校の六年間、いや、小学校から西へ五百メートルの中学校への三年間も、毎日毎日この原っぱを横切っていた。

戦前のことは知らないが、物どころについて原っぱを知った頃、そこは関東配電（現・東京電力）の土地だということを知った。私が原っぱを知る前、そこは近所の人達の畑であつたとも聞いた。終戦直後の貧しい時代に、どうやら勝手に畑作をしていたらしい……。

私が小学校に入学したのは昭和二十六年、もはや近所の人達の畑作は終わっていた。で、何になつたかと云えば、ただの草っぱらに転じていたのである。北西の一角が道路を隔てた製材所の原木置場として使われていた以外のただの草っぱらがぼくらの原っぱだった。

積まれた丸太のスキマや、草を倒して作つたぼくらの家も、その草を輪にくくって、引つ掛かる人を笑う悪戯も、何もかもが楽しかった。中で、一番だったのはやはり野球だった。ただし、野球は場所取りが肝心。学校が終わると一目散に原っぱを目指し、

全員のランドセルを我が家の玄関に放り込むと、日が暮れるまでうつつをぬかした。場所取りに負けた日は、隅っこで三角ベース。

小学校を卒業すると、同級生もバラバラとなり、誰も原っぱに集まらなくなった。中学校の終わり頃だったかしらん、原っぱは塀で囲まれ、一隅に住宅を構えた三面のテニスコートになった。無論、東京電力の管轄だ。

十代の終わり頃、隣家の貞夫ちゃんと一緒にコートを使わせてもらっていたが、テニス部の貞夫ちゃんとは、とても対等とはいかず、いつの間にかラケットを握ることもなくなり、以来、この土地とも疎遠となった。

それが、昭和五十年代の半ば頃から、地域住民と世田谷区がここを公園にしようと東京電力と掛け合い、昭和六十一年に世田谷区が取得、子供の遊び場として開放された。

子供の遊び場と云えば、ぼくらの原っぱの復活である。ただ、当時四十を超えた私には縁がない。後は、願わくば、今日の子供達の原っぱになることを望んだが、駆け廻る子の姿を見ることは稀で、かつての子供と今日の子供の違いを思い知らされた。

そして、昭和の終わりの六十三年、晴れて北沢公園が誕生した。人工の小さな灌と池、藤棚の下、砂場と遊具が二つ、後はゲートボール用？の平地の公園だが、公園は公園、時折の催し物などもあつて、原っぱ転じてオアシス。私の願う原っぱは幻となつたが、これも悪くはないのだろう……。 （作家）

作家紹介 世田谷生まれ。イラストレーター。作品集に『風景図鑑』『音楽図鑑』、著作に『東京の100横丁』他。

ヨソの文学館・記念館

【津和野の安野光雅美術館】

山陽新幹線「新山口駅」から山口線に乘換え「津和野駅」までは約一時間半。その間を走る「SLやまぐち号」は郷愁を醸し出す何とも言えぬ汽笛を響かせ、子供たちの夢を乗せている。山口駅に途中下車すると、日本三名塔のひとつ、檜皮葺（ひわだぶき）屋根造りの国宝「瑠璃光寺五重塔」を見ることが出来る（日本三名塔の他二基は、奈良の法隆寺と京都の醍醐寺にある五重塔）。

「安野光雅美術館」は津和野駅を降りると斜向かいにある。漆喰の白壁とこの地方特有の赤茶色の石見瓦を葺いた建物は、如何にも安野氏らしい故郷を知り尽くせばこそその勢いと美しさを感じさせる。本館ロビー壁面は不思議な「魔方陣」のタイルで装飾されている。第一展示室（常設展）、第二展示室（企画展）の作品には全て安野氏の文章が添えられている。別館に渡ると、何と「昔の教室」を再現した部屋やプラネタリウムがある。小さな机と椅子の並ぶ昭和初期の木造の教室は、今の大人たちが子供時代に空想を育んだあたたかな空間である。プラネタリウムは五十席を設け、壮大な宇宙空間や津和野の四季の夜空を映し出す。空想や夢が如何に大事かを素直に感じられる館である。

平成十三（二〇〇一）年三月二十日、安野氏七十五歳の誕生日に同館を開館、昨年六月には京都府京丹后市久美浜町谷の和久傳の森に、安藤忠雄氏設計による美術館「森の中の家 安野光雅館」を開館。今春九十二歳を迎え、なお気負うことなく生み出される作品たちの中に年輪を刻み続けている。

住所 島根県鹿足郡津和野町後田イ六十の一
電話 〇八五六―七二―四一五五
入館料 一般八百円
休館日 木曜、年末三日間

（友の会会員 幾田充代）

バス旅・初夏の東海文学散歩に参加して

奥野 理恵子

五月十五日七時五十五分、小田急シティバスにて参加者四十一名新宿駅西口を出発。東名高速は渋滞もなく快適な走行を続け、車中にて井上靖の随筆「あらし」(『幼き日のこと』より)と長編小説『おろしや国酔夢譚』からの一節を会員お二人が朗読された。傾聴して井上文学へ誘われる。また、日文化交流協会で井上靖の中国の旅に何度も同行されたという佐藤純子氏よりエピソードを直にお聴きできたことも貴重であった。さらに、若山牧水については平出会長より解説があり、ちょうど宮崎県日向市の若山牧水の生家を訪問してきたばかりとのことで熱心にお話しされた。車中での充実した文学タイムであった。

十時十五分最初の目的地、駿河湾と富士山を望む若山牧水記念館に到着。先々代ご住職が牧水と親交がありだったという乗雲寺の林茂樹氏の解説を拝聴。三十七歳で此処沼津に永住を決めた牧水は一日に一升以上の酒を楽しみつつ歌の創作に励んだという。また彼が愛した千本松原の伐採計画に対し反対の檄文を新聞に寄稿するなどの反対運動の先頭に立ち静岡県にその計画を断念させたとのこと。展示物を閲覧後、現在千本浜公園として残る松林へと歩く。潮風を防ぎ木陰を作る松林の薫風に心洗われる。ここには牧水の歌碑がある。

幾山河 こえさきゆかば 寂しさの

はてなむ国ぞ けふもゆく

同じ公園に井上靖の詩も刻まれている。

千個の海のかけらが

千本の松の間に

挟まっていた

少年の日

私は毎日

それを一つずつ

食べて育った

井上 靖

昼食後バスに乗り三島北部のクレマチスの丘に向かう。駿河平の気候に恵まれたクレマチスは白、紫、えんじ、ピンク等色も大きさも多種。薔薇や忘れな草もあしらわれた美しい広大な庭に感嘆する。この庭にはイタリアの現代具象彫刻の巨匠ジュリアーノ・ヴァンジの作品の展示もあり、材質やテーマの説明を受けながら鑑賞した。

その後井上靖文学館に移動。作家の原稿、写真、パネルを見た後、講義室に座る。講演者は井上靖のご長女浦城幾世氏。演題は「父 井上靖と私」。作家の日常生活と父から教えられたことを静かな語り口で話された。絵画について「ゆつくり眺め、しっかり見なさい。きれいに描かれた絵よりも何かを感じさせてくれる絵が素晴らしいのだ。」と教えられたとのこと。また自宅に客人があれば家族に同席させ、多くの方と会話する機会を与えられたことで、物事を広くみる眼、人を見る眼を育てられ、「父に励まされ、褒められることによって家族それぞれが成長したと思う」とも話され、作家である父親への深い尊敬を感じた。

講演後、花々に別れを告げ帰路につき、六時半新宿に到着。爽やかで学びのある企画に参加できたことに感謝。

(友の会会員)

林芙美子文学の魅力

(大陸魂を持つ女)

志方 瑞恵

緑陰の壇上、ソコロワ山下聖美先生は熱籠る語りよう、魅入られた。「コンチクショウ」「仕方ない」までの林芙美子。先生の、芙美子の知られざる側面に重点を置き、御自身の足と目と耳で調べ上げた生々しい講演は、芙美子の人生は日本近代史と密接に係わった一生であったことが解る。私は当時のベストセラー『放浪記』は読んでいない。森光子主演の舞台を堪能し、林芙美子と出会った。二千回演じ魅力を繋ぎ続けた女優に、先生は「学術的貢献に価する」と述べる。私はその恩恵の一分を受けた一人である。

芙美子は貧しく宿命的に放浪者である。行商で定住など出来ない。母は道徳心などなく欲望に駆られ行動する。幼少期に見た母の姿に、人間の性や人生の表裏を学ぶ。貧乏ながらも学問の場を得、文学への野望を抱く。「コンチクショウ」。悪たれた文体に本音の飾らないハングリー精神が強く伝わる。食べれば治る。そして書く。生きる根源は自分の体感に基づく。「胃袋作家」は貧乏であったことも売りにする。戦争に抗すべからざる世相。軍はペン部隊として文士連隊を南方へ派遣。「目的は戦争を利用し、一つの旅として南方へ行く。自分で確かめたい。」川端康成に手紙を出し、芙美子も発つ。単独行動で女性一番乗りの記事は朝日新聞のスクープに。だが戦争協力者としての悪い噂。文壇仲間の悪評の中に身を置かれる。その後世界各地への旅へ。「小さな融通のきかぬ大和魂というものに愛想が尽き、大陸

魂というものを吸って来ようと思う。」その土地を足裏と胃袋で味わう体感。常に三等車の眼差しで、多民族国家でも言語を越え食で交わるコミュニケーション能力は、まさしく大陸魂である。」「仕方がない」は諦めではない。人生での経験は、矛盾を内包しつつ生きる人達を裁く事ではなく許容すること。文学的に昇華した視座である。先生は、「作家の臨終はイメージを決めてしまおう」と述べる。最後に接した生き証人、芙美子の無償の愛情を注がれた大泉淵さんの言。「静かに美しく亡くなった、気高さを見た。最後のご褒美だと思います」。講演後、開催中の「貧乏コンチクショウ」を観覧。「芙美子死面素描」宮本三郎作。眼を閉じた芙美子と静謐な対面をした。

(平成三十年五月二十二日 世田谷文学館にて開催)

(友の会会員)

エッセー「わたしの一冊」の原稿募集中！

- ・タイトルに本の題名(著者名・出版社名・出版年も)明記
- ・あなたのお名前、連絡先を明記・字数は六〇〇字以内(厳守)
- ・文意を損なわない範囲で編集させて頂く場合があります
- ・原稿はお返ししません
- ・会報に順次掲載しますが、頁数の関係で掲載が遅れる場合があります
- ・原稿は友の会に郵送かFAXでお送りください
- ・掲載は一人一回



講座「木下李太郎と白秋・啄木 ―明治末期における交流を探る―」を聴いて 坂谷 貞子

芦花公園駅から世田谷文学館までの道の両側に百日紅が鮮やかな紅を揺らして、乾いた暑い日の講座であった。

講師の丸井重孝氏は静岡県伊東市「伊東市立木下李太郎記念館」館長を務められ、歌人としても広く活躍の方である。近著『不可思議国の探究者・木下李太郎―観潮楼歌会の仲間たち』は日本短歌雑誌連盟の評論賞を受賞されている。

詳細なレジュメと映像を駆使して、『啄木日記』『李太郎日記』、『観潮楼歌会』、『スバル』、『パンの会』の活動などのエピソードを繋げながら語って下さった。

李太郎、啄木、白秋は雑誌『明星』を通じて「新詩社」同人となり、活発な創作活動を行っているが、それに飽き足りない文学に対する意欲が白秋、李太郎の「新詩社」脱退、『パンの会』の立ち上げへと向わせ、やがて『明星』の終焉。後継誌『スバル』には啄木が編集兼発行人として関わるなど、この間の三人の交流はお互いの創作活動を触発しあう大事な接点であったように思えた。

啄木にとっての李太郎は出会って直ぐは「最高の友」やがて「もう敵ではなくなった」と突き放すなどしても、生涯気になる友人であったようだ。

冷静沈着な李太郎と啄木について丸井氏は、権藤愛順氏の論考『大逆事件を契機とする両者の再接近について』の一部分を引いて話されたことがとても

印象に残っている。「国家と個人との関係について真面目に疑惑を懐いた」李太郎と啄木の思想は、対立よりも多くの共通点がみられると語られた事にも頷ける。

李太郎の戯曲集『和泉屋染物店』は大逆事件を暗示させ、国家観、道徳観が表れている作品といわれる。大逆事件は啄木の大関心事。二人がもつと語り合えたなら、もう一度「最高の友」になれたかも知れない。

晩年の『啄木日記』には「時々訪ね呉れたる人に木下李太郎君あり」と記されていて、李太郎の人としての優しさも感じられる。

多感な青年達が『明星』から『スバル』へと与謝野夫妻の元を離れても交流が続いていたのは不思議なことである。李太郎と啄木の名前の詠まれた歌が思い出されたのでここに紹介しておきたい。

李太郎大学やがて筆執りぬむかし恋しく我の乞ふ時

寛

『与謝野寛遺稿歌集』

思ふ時必ず見ゆれ微笑みて左の肩を揚ぐる啄木

寛

『与謝野寛遺稿歌集』

帰りきてわが李太郎わすれしや待ちつるものを煙草の話

晶子

『心の遠景』

しら玉はくろき袋にかくれたりわが啄木はあらずこの世に

晶子

『夏より秋へ』

(友の会会員)

(平成三十年七月二十七日 世田谷文学館にて開催)



講座「島村抱月と松井須磨子」を聴く

山口 美恵

「生まれは違いますが、育ったところはこのあたり……」ロシア文学者、演劇評論家、神奈川大学名誉教授の中本信幸先生の講座が始まる。六月二十三日午後、世田谷文学館二階の講義室はほぼ満席。温厚な先生のお声はやや低いが演壇のバックに魅力的な須磨子のスライドが大写しになるので、私たち受講者はよそ見をしたりする暇はない。

タイトルの二人はおよそ百年前、一世を風靡した演劇人である。「ボーゲツ」「スマコ」と言ってわからない人も「いのち短し恋せよ乙女」と「カチューシャ可愛や」のメロディを口ずさんでみるとみんな頷いてくれる。

島村抱月は島根県生まれ（明治四年）、松井須磨子は長野県生まれ（明治十年）、抱月は旧東京専門学校（早稲田大学）を卒業、講師となる一方、坪内逍遙の文藝協会の講師も務め、小山内薫と市川左団次による自由劇場の第一期生として入所した松井須磨子と接点をもつ。

明治四十四年は須磨子が帝国劇場で『ハムレット』のオフィリアを演じ、歌舞伎など旧派から離れ、新しい演劇を世に広めようとする波が広がる一方、大逆事件で幸徳秋水ら十二人が死刑執行された年でもあった。

抱月、須磨子がこのような日本の情勢をどう考えたか分からないが、二人の恋はどうやら大問題となり、文藝協会を脱退せざるを得なくなり、新しく藝術座を創設。トルストイ原作、抱月演出の『復活』を全国巡業。劇中で須磨子が歌う『カチューシャの

唄』は大人気となる。

大正五年二人は同棲するが、大正七年十一月四日、抱月はスペイン風邪で急死。その二カ月後、須磨子は藝術座の裏の道具部屋で自死。

後半は、中本先生のお嬢さん、須藤小百合さんが『カチューシャの唄』を歌ってください。プロのオペラ歌手による『カチューシャの唄』を聴き、抱月、須磨子の舞台を偲ぶことができた。

カチューシャ可愛や 別れの辛さ

せめて淡雪とけぬ間と

神に願いを ララ かけましようか

カチューシャ可愛や 別れの辛さ

今宵ひと夜に降る雪の

あすは野山の ララ 路かくせ

（友の会会員）

「文学に見るヨーロッパ貴族社会の女性たち」を聴く

片江 三紀子

七夕、西部日本は激しい豪雨が降り続いていましたが、関東地方は大した影響もなく金沢先生の講座が開かれました。金沢美知子先生は東大名誉教授でロシア文学が専門です。

十七世紀、ロシアはロマノフ王朝の支配下にあり、文化的、物理的、精神面でも西ヨーロッパに一世紀遅れた状態でした。そのロシアに劇的に変化をもたらしたのがピョートル一世で、彼は都をモスクワからサンクトペテルブルクに移し、様々な改革を言

葉、学問、技術面等々西欧化を推し進めていきました。続く十八世紀、四人の女帝が治め、エリザベータ二世は仏文化に心酔し、人生を楽しみ、貴族の娯楽文化が入ってきました。その後に続くエカチェリーナ二世は啓蒙思想を進め、長い間君臨したため多大な影響を与えました。昔からの無知蒙昧、自然に対する畏怖等、過去に縛られていた時代から自分を見つめなおし公私の意識を明らかにするよう勧め、上流階級では舞踏会も盛んに行なわれるようになり、言葉、服装、様々な西欧文化が入りこみ、女性が表舞台に出る機会も増えてきました。十七世紀の仏小説『クレヴの奥方』にある場面と同じような会話が十八世紀ロシアの小説に著わされています。しかし舞踏会での大事な要素となる「恋愛」も今のものとは異なり個人的なものではなく、衆人環視の中で始まり社会の評価に影響されたり、又寝室も召使い初め多くの人々の出入りする場であり、現在のものとはかなり異なったものでしたが、貴族は余裕もあり知的な生活もしていたため、精神文化も受けやすい状態にあったといえます。

小説はフィクションではありますが、複数の文学作品に同じような場面が著わされているということは確実にその精神的傾向があったと考えられます。

金沢先生は十八世紀末から十九世紀にかけての正装姿の女性の肖像画等も用意され、まだまだ沢山話したいこともおありのようでしたが時間がなくなってしまいました。私も若い頃、夢中で『アンナカレーナ』や『戦争と平和』を読んだ時の事を思い出してとても楽しく聞かせていただきました。

（友の会会員）

（平成三十年七月七日 世田谷文学館にて開催）

八十路半ばの富山育ち

富山より

高畑 史子

「幼稚園から大学迄全部富山です。立山連峰の富山です」。他県で自己紹介する時の口ぐせだが、心の中には東京へ行きたい、東京に住んでみたい、という思いが小さい頃からいつもあった。今も変らない。これは幼い頃、冬になると雪に閉ざされ外へ出られずこたつにもぐり込んでいると、いつも母が傍らで「東京は雪が降らないところ。とても暖かくていいところ」と呟くのを聞いて育ったからである。母は大正時代東京の女学校を出ていた。

昭和二十年女学校に入学した年の八月一日夜、富山はアメリカのB29による空爆で市街は火の海と化した。焼夷弾の降る中、着の身着のまま逃げ逃げて近くの川の中で一夜、翌日歩いて海辺の松林で二晩、焼跡へ戻って三晩、と今でも世界の何処かにある日々を過ごした。だから我々には今更こわいものはない、いや、認知症はコワイ、と女学校育ちは盛り上がる。女学校は数年後男女共学の高校となり、四回も転校させられた。

東京へ行ってみたいという幼児からの憧れが初めて実現したのは大学時代二十歳だった。当時汽車で東京迄六時間かかった。今二時間。

やがて卒業、就職（民間放送）、結婚と順調に小道を辿った先にサラリーマンの妻（雑役婦）六十年という長いレールが延びていた。途中雇い主の転勤十年の継ぎ目があったが、残念ながら東京ではなく大阪十年だった。

大学時代の恩師佐伯彰一先生が、世田谷文学館の

館長にご就任のことをお聞きしたのはいつ頃のことだったろうか。先生は時折御講演などで御来富になり、その夜は先生を囲んでいろいろお話を聞く楽しい時間になったものだ。

東京へ行ってみたい、がいつしか世田谷に住んでみたい、になっていったのはふとした思いで投稿した世田谷文学賞随筆部門で思いがけず賞をいただいた頃からだろうか。

いつも思うのだが私にとって大学四年間は自分の人生で最高に幸せな時代だった。入学して初めて先生の御講義を聞いた時の感動は忘れられない。当時の先生の授業を想い出すだけで若い日の空気に包まれるようだ。

そうした想い出や東京への憧れなどで八十路半ばは概ね明るい。
（友の会会員）

せたぶん・うおっちゃんぐ



『辻井喬Ⅱ堤清二 文化を創造する文学者』

菅野昭正編（世田谷文学館連続講座）平凡社刊

鈴木 美奈子

まず表紙の二枚の写真を見てみよう。



右はセゾングループを率いて「無印良品」など新

しい事業を展開していく企業家の、そして左は辻井喬が『不確かな朝』から出発した詩人であり、『沈める城』の小説家でもあった彼の生きた二つの世界を物語っている。

晩年の回顧録、『叙情と闘争』（二〇〇九）のなかで、堤清二が外部に向けられる企業経営のなかで、何か満たされないものが渦巻き、わだかまる情感を詩人・辻井喬がひきつい、それを慰撫し鎮める道筋を見つけ出そうとする、それが彼の生きた「闘争」の内実であったと書いている。彼の穏やかな笑みの背後に抑えている苦しみとは何であつたろうか。

生母を知らない複雑な家庭環境、戦争中の狂熱的な軍国少年、

東大時代の共産党細胞活動（スパイ容疑で頓挫）、重い結核で生死の間を彷徨う。

人生前半のこの特異な経験が、「はげしい無関心」を標榜しつつ、戦争を知っている最後の世代としての使命感に燃えた反戦行動の最終ステージを飾る。

最後に本書の内容を紹介。

二〇一四年十月の当文学館での連続講座をもとに「まえがき」と「あとがき」を加えて刊行された。

まえがき 二つの世界を生きたひと

詩人・辻井喬

菅野昭正

辻井喬Ⅱ堤清二という人間

粟津則雄

二つの名前を持つこと

松本健一

辻井喬にとつての政治と文学

三浦雅士

創り続けられた時間と空間

山口昭男

あとがき

小池一子

【参考】 去る二〇一二年三月十一日に、辻井喬氏は、文学館と友の会の共催講演に於いて、『大震災と文学』と題し、

ご講演なさいました。

（友の会会員）

～こういう催しがありました～（２０１８年５月～２０１８年９月）

【講演・講座】

（企画委員会）

月 日	講演・講座名	講 師	内 容
2018 年 5 月 15 日	講演 父 井上靖と私 於 井上靖文学館	浦城 幾世氏	北に秀麗富士、南に紺碧の駿河湾を望むクレマチスの丘の井上靖文学館で、お住まいの東京からお出掛けくださったご長女の浦城氏から、父上と暮らしたご家庭の日常を伺えたのは、貴重な事だった。
5 月 22 日	講座 林芙美子文学の魅力 ～大陸魂を持つ女～	ソコロワ山下 聖美氏	あくまで庶民の目線で自らの感性に正直に作品を書き続けた芙美子であるが、日本を飛び出す行動力に裏付けされた「大陸魂」ともいうべき大きな視点が確かにあり、その国際性が林芙美子文学の魅力のひとつであると力説された。
6 月 23 日	講座 島村抱月と松井須磨子	中本 信幸氏、 須藤小百合氏 (オペラ歌手)	藝術の革新をめざして作家・演出家の島村抱月は芸術座を創建。看板女優の松井須磨子の魅力によって名実ともに「新劇」が誕生した。劇中歌の『カチューシャの唄』や『ゴンドラの唄』は広く愛唱されていくことになった。講座内でも講師ご長女の独唱によりご披露いただいた。
7 月 7 日	講座 文学に見るヨーロッパ貴族 社会の女性たち	金沢美知子氏	18 世紀ロマノフ朝ロシアの宮廷文化を支えていた女性たちを中心に、貴族社会の恋愛の作法や心理を描いた文学作品に触れ、宮廷と貴族の文化の光と影も人間の歴史の発展の重要な足跡となっていることを学んだ。
7 月 27 日	講座 木下杢太郎と白秋・啄木 ～明治末期における交流 を探る～	丸井 重孝氏	白秋と啄木は杢太郎にとって生涯気になる存在だったという。「国家と個人」について共通の問題意識を持っていた彼らの交流が如何に密度の濃いものであったか、新しい時代へ向けたそれぞれの情熱と真剣な生き様の一斑を伺い知った。
9 月 22 日	講演 文学と音楽との対話 ～白秋・啄木の詩と音楽 (文学館と共催)	細川 光洋氏	講演会場にワーグナーやショパンの音楽が実際に流れるという斬新な講義となった。白秋や啄木らにとって、西洋の美しい旋律と詩とは一つに結びついたものだったことを学び、〈文学を聴き、音楽をよむ〉よろこびを体験するという極上の時間であった。

【散歩】

月 日	散 歩 名	案 内	内 容
2018 年 5 月 15 日	バスで行く初夏の東海文学散歩 ～沼津千本松原・若山牧水記念 館を参観、クレマチスの丘・ 井上靖文学館で浦城幾世氏 (ご長女) の講演を聴く～	各館関係者・ 学芸員の皆 さん	クレマチスの丘に花が満開となった 5 月の晴れの日、折しも若山牧水歿後 90 年、井上靖生誕 110 年に因む文学散歩が叶った。車中では両文人に纏わるトークや代表作の朗読のご協力があり、井上靖文学館では浦城氏講演も企画され、帰り着くまで文学に浸った一日となった。

編集後記

友の会 20 周年記念品のクリアホルダーには、フランスの 10 人の文人が発した箴言が刷り込まれている。透明なグリーンの水底から浮かび上がってくるかのごときこれらの珠玉の言葉は、フランス文学の泰斗・菅野昭正世田谷文学館館長が自ら選択してくださったものである。

先人が長い歴史の中で築き上げてきた人類普遍の価値観の否定が、地球上のあちこちで蔓延し始めている今だからこそ、世紀を超えて読み継がれてきたこれらの箴言の意図するところを掘り下げてみたい。それは、わが文学館友の会の活動の真髄でもあるように思う。 (堀 伸雄)